

陳舜臣さんを語る会通信

NO.104 May. 2023

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日 2023年5月10日
<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

中国歴史エッセイ47編『史林有声－中国歴史随想－』

本号ではエッセイ集『史林有声－中国歴史随想－』（2003 NTT出版）を紹介いたします。（編集委員 橘雄三）

『史林有声』（NTT出版）
小見出し、傍線は編集委員の加筆

あとがき

そろそろエッセイが一冊分ほど溜りましたといわれて、私はいつものことながら、「もうそんなになりますか」と驚いた。とくに今回は私が脳内出血で、たおれたあとなので、その感が深かった。

ここに収めた作品は、私の大病前のもあれば、その後のものもある。原稿をみれば、右手が不自由になっているので、病氣前後かということにははつきりとかかる。

ところが活字になったものを読むと、その区別はほとんどわからない。それで、私は実をいうと、ほっとしたのである。

香港収復という歴史的なイベントがあり、その前はちゃんと歩けたのに、そのあと虎門砲台を訪ねたときは、足をひきずり杖をついて歩いていった。

日中国交正常化二十年についてのエッセイがあり、あれから十年たったことがわかる。この十年が激動の歳月であり、なぜそうなったか、これからゆっくり考えたい。

本書から、歴史は流れてとどまらないが、それを考える時間は、それが必要であれば、いつでもとどまってくれ

巻頭「題史林有声」

題史林有声 史林有声に題す

戊戌群拳搭一舟

戊戌と群拳は一舟に搭る

重陽辛亥問無由

重陽と辛亥は問うに由無し

百年遺事難搜尽

百年の遺事は搜し尽すは難し

行過盧溝歲月流

行きて盧溝を過ぎ歲月流る

戊戌政変の人たちと義和拳の人たちは、もともと同じ舟に乗ったのであり、重陽蜂起（一八九五）と辛亥革命（一九一一）は

どちらも孫文を中心起こったことは疑問の余地はない。この百年の歴史を私は探究しようとしているのだが、なかなか難しい。盧溝の出来たばかりの石橋をわたりながら

金の詩人元好問（一一九〇―一二五七）は、なんどもふりむいたという。八百年後の私はそこに起こった近代のことを思い、歲月の流れをしみじみとかんじた。

二〇〇三年五月

「序なぜ歴史を書くのか」

抜粋引用しながら要約します。

「なぜ歴史を書くのか」ということですが、人間はなにか迷った時には過去の判例を検討する。あるいは体の具合が悪ければ、かかりつけのお医者さんのカルテをみる。歴史はその判例あるいはカルテでしょう。それだけに正しい歴史が求められるのですが、正しい歴史が書かれなかった例はあります。

とし、殷の最後の王、紂（ちゆう）（前一一〇二七頃）、主人の隋に反旗をひるがえして、唐を建国した李淵・李世民父子の事蹟に言及します。そして、司馬遷の『史記』についても記述します。

『史記』の中の徐福や蒙恬、有名な荊軻のことなども注意して読みますと、筆者司馬遷（前一二五―一四五）のものの書き方、記録の仕方がよくわかります。司馬遷は古い過去のことでも取材するのです。調べるべきことは自分の足で調べているのです。

そして最後、あやまったことは書かないという歴史家の心意気を伝えるつぎの話で締めくくっています。

春秋時代の斉に崔杼（さいしよ）という男がいた。記録官が「崔杼が主人を殺した」と書いたところ、その記録官は殺された。そうしたらその弟がまた書き、同じように殺された。都の歴史家がみんな殺されたと伝え聞いた地方の歴史家が、簡を背負って「あいつが殺した」と書きに都にやってくる。



表紙

『史林有声』 各編内容（Ⅰ） 及び補足

Ⅰ	項羽と劉邦	項羽に厳しい歴史記述。総合点を算出する場合、項羽にかなりの点数を足すべき
	諸葛孔明の秘密	諸葛孔明は謹厳実直で清廉潔白、女性の話はないし、面白みがなく小説には書きにくい人物
	笑わん名裁判長	包拯(ほうしょう 北宋の人)は中国の大岡忠相である。より正確には大岡忠相は日本の包拯である
	大いなるモンゴル	陳舜臣さんは、寛容と公正そして誇り高くさわやかであった世界帝国「モンゴル」とおっしゃるが…
	耶律楚材を書く	『耶律楚材』(1994 集英社)の初出は、「小説すばる」1993年1月号～94年1月号
	鄭成功生誕三七〇年に寄せて	鄭成功は1624年の生まれ。それから300年、同じ干支、甲子の年に陳舜臣さんは生まれた
	『天球は翔ける』の琵琶山	『桃源遙かなり』(1964 小説現代)が、同年7月7日付読売新聞夕刊で吉田健一氏に激賞された

『大衆文学時評』
＜上＞
吉田 健一
よし だ けん いち

島の生活を意
味する桃源郷

海賊島の強い印象

陳舜臣の「桃源遙かなり」

強烈な配色さ
ながらの効果

オランダ室内
画を思わせる

中央が包拯↓

「笑わん名裁判長」
抜粋引用します。

包拯は北宋の咸平三年（一〇〇〇）のうまれだから、大岡忠相より七百年近く前の実在の人物である。待制というポストにあったので、包待制とも呼ばれる。大岡忠相が越前守と呼ばれるのに似ている。包待制はのちに知開封府（首都の知事）から副首相に昇進した。

さまざまな裁判譚が伝えられているが、ほとんどが包待制の名に仮託した物語である。二母一児を争うのように、中国では包待制の判決とされているものが、日本では大岡裁きになっている。

彼は笑わないことで有名であった。『宋史』に、彼の笑いは「黄河清」にたとえられた、とある。黄河は千年に一度

しか澄まない。それほどでもないだろうが、包待制はめったに笑わないのだ。笑いを抑えたところから、英知が湧き出せたのではあるまいか。

かつて、『開封府―北宋を包む青い天―』という中国ドラマがあった。北宋の仁宗の時代、頭脳明晰、清廉潔白、公平無私な青年官僚包拯（通称包青天。副題はこの名からきている）が数々の難事件を解決していくというストーリーです。



『天球は翔ける』の琵琶山

抜粋引用します。

舞台は華南のある海賊島から始まる。私はアウトローの世界に興味をもち、三十六年前に『桃源遙かなり』という中編小説を書いた。それが吉田健一氏に激賞され、新人の私は大いに面目を施したものである。新聞の文化面の時評欄全部を使うという破格の扱いであった。その小説の島の名は「琵琶山」であり、私は新しい長篇小説『天球は翔ける』に同じ地名を使った。二十一世紀の救いとなる人間集団の形態としての「多民族国家形成」初期の物語である。

『桃源遙かなり』は昭和39年、『小説現代』の8月号に掲載された。陳舜臣さん、最初期の作品です。デビュー数年の作家の作品が著名な評論家「吉田健一氏に激賞され」たのだ。その喜び、得意げが、三十六年後の文章からも感じられます。

昭和39年7月7日付読売新聞夕刊紙面に上に掲載しました。当時の縮刷版は版が小さく印刷も悪いので読みづらいですが、「新聞の文化面の時評欄全部を使う」という破格の扱い」という雰囲気はわかります。

『天球は翔ける』の琵琶山
抜粋引用します。

舞台は華南のある海賊島から始まる。私はアウトローの世界に興味をもち、三十六年前に『桃源遙かなり』という中編小説を書いた。それが吉田健一氏に激賞され、新人の私は大いに面目を施したものである。新聞の文化面の時評欄全部を使うという破格の扱いであった。その小説の島の名は「琵琶山」であり、私は新しい長篇小説『天球は翔ける』に同じ地名を使った。二十一世紀の救いとなる人間集団の形態としての「多民族国家形成」初期の物語である。

『史林有声』各編内容(Ⅱ) 及び補足 ■はキーワード

Ⅱ	交流の成果	『走れ蝸牛』の〈I〉「ウシ、ウシ、ウシ」と重なる内容です。本通信No.101参照
	二十世紀のタブー掃のとき	1992年、長江を遡る船上で開かれた「三峡シンポジウム」に参加しての感慨である
	想像力の翼	中国が漢代以降二千年、停滞しているのは、「述而不作」という儒教の根本姿勢のせい
	栄えつづける道	人民の批判の上に政治を行うという原則を持ち続けることが、栄えつづける道 ■平清盛 魏忠賢
	大衆に限りなく優しく	魯迅展によせて。魯迅の経歴や生活を知ることが、疑いもなく彼の作品を理解する重要な基礎
	晩節	晩節は人間が死ぬ直前の時期です。節を厳しく問われるのは、降参するか、しないかという場面 ■李陵 蘇武
	紫禁城こぼれ話	明と清では紫禁城の雰囲気はずいぶん異なった。明では宦官が政治に介入、その弊害がすこぶる大であったが、清では様々な雑役に従事するだけで、権勢をふるったのは、清末の李連英のみ
	景観雑感	紫禁城は政治をつかさどる外朝と、皇帝の住居である内朝からなる。外朝には水もなく土もない
	虎門の池	虎門の池とは、アヘン戦争の時、林則徐がアヘン処分のために作った人工の池のこと
	草原と海洋の民に学ぶ	草原の民としてモンゴル政権、海洋の民として沖縄の歴史をひもとく、生きる知恵を学ぶ ■耶律楚材 閩人三十六姓 ミット アルメニア人虐殺
	日中両国の任務	「アジア競技大会」の歴史を振り返り、春秋時代の葵丘の盟に言及し、日中両国はただ両国の問題だけではなく、世界、少なくともアジアの問題を視野に入れなければならないと結ぶ
	収復された香港	アヘン戦争と南京条約、及びアロー(第二次アヘン戦争)と北京条約を詳述。黄遵憲の「欲界にして亦た仙都なり」で結ぶ ■台湾の二・二八事件

「晩節」

抜粋引用します。

晩節は人間が死ぬ直前の時期です。節を厳しく問われるのは、降参するか、しないか、という場合でしょう。

とし、前漢武帝の時代、匈奴に使して捕われ節を守って降らなかつた蘇武(前100前60)と、匈奴と戦って敗れ、捕われ、単于のむすめを妻とした李陵(前74)に言及。節を守った蘇武と節を汚した李陵という図式ですが、司馬遷が李陵を弁護して宮刑

に処せられたことは有名。
晩節といえ、すぐに思いうかぶのが瞿秋白です。瞿秋白は共産党の総書記にまなつた人物です。一九三五年、江西革命根据地で国民党軍に捕われ、福建省長汀で処刑されましたが、処刑前に書き残した「多余的話」をめぐって、周恩来により、「晩節を汚した」と批判されたりもしました。

虎門の池



映画「阿片戦争」から

中国人に忘れられぬ史跡



陳 舜臣

中国近代史の有名な場面では、この虎門に於けるアヘン処分が、その歴史に刻み込まれている。アヘン戦争の終結は、この虎門の戦いで決定的な役割を果たした。この虎門の戦いは、アヘン戦争の終結を告げる重要な出来事であり、中国の歴史に刻み込まれている。この虎門の戦いは、アヘン戦争の終結を告げる重要な出来事であり、中国の歴史に刻み込まれている。

この虎門の戦いは、アヘン戦争の終結を告げる重要な出来事であり、中国の歴史に刻み込まれている。この虎門の戦いは、アヘン戦争の終結を告げる重要な出来事であり、中国の歴史に刻み込まれている。

この虎門の戦いは、アヘン戦争の終結を告げる重要な出来事であり、中国の歴史に刻み込まれている。この虎門の戦いは、アヘン戦争の終結を告げる重要な出来事であり、中国の歴史に刻み込まれている。

『史林有声』 各編内容(Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ) 及び補足 ■はキーワード

Ⅲ	三星堆文物	三星堆(さんせいたい)遺跡。今の四川省にあった、殷と同時代の文明の遺跡 ■「巨大神樹」の画像 →	
	芸術としての文字	漢字が「書」という形の芸術になりえたのは、誕生したときからの宿命であった ■ロゴスを内蔵	
	漢詩と書	中国では古来、総合性が重んじられ、一芸に秀でるよりも、諸芸に通じた人のほうが、すぐれているとされた ■唐代、書の名手、欧陽脩、褚遂良、顔真卿も詩はいまひとつ	
	時間と距離のロマン	正倉院宝物、平螺鈿背八角鏡は時間と距離のロマンチズムを、そのなかに無造作に吸収し、さらに惜しみなくそれを周囲に放射し返しているかのようだ	
	芭蕉と杜甫	天下国家を憂え、少しでも良い官職に就きたいと願った杜甫、おのれの俳諧を、現実の生活から離れた別天地のものとした芭蕉	
	大いなる空間	大いなる空間とは高層ビルの内壁面のことで、そこに描かれる名画を云々している ■謝靈運	
	油滴天目茶碗	指さきでそっと触れたいくなる名器、安宅コレクション油滴天目(ゆてきてんもく)茶碗	
	景德鎮と宜興	景德鎮は「工人」のわざが光り、宜興のものは「文人」のにおいがただよう。また、前者は分業による共同制作で、個人の名がでにくい、後者は名人の名と作品が伝わっている	
	真贋をこえて	黄公望の『富春山居図』について書いた随筆は他に、『仙薬と鯨』『富春山居図』の行方がある	
	胸中の逸気	ピサネッロの「聖エウスタキウスの幻視」と石濤の「鬼子母神図巻」	
Ⅳ	翡翠	西欧の輝石が「外から入ってきた光の輝き」なら、玉は「石の内部からにじみ出てくる美しさ」	
	食と歴史	古代においては、食に関係した人の地位はきわめて高かった ■伊尹 太公望 呼韓邪単于	
	甘藷	甘藷はブラジル→スペイン→呂宋など東南アジア→福建→島津侵攻直前に琉球へ→薩摩へ	
	琉球の食べもの	一戸あたりの昆布消費量をもっとも多いのは沖縄県 ■調所広郷	
	美しい梅	古代、梅の実実は保存食であり、調味料であった。それを美しいから歌にでもと思いはじめたのは…	
	端午	今年の端午(旧暦五月五日)は、陽暦の六月八日にあたっていた。■この、6月4日に天安門事件	
	野生	西双版纳にある、「茶樹王」と呼ばれる樹齢八百年の古木も野生ではなく栽培樹?	
	医食同源	現在の中国、牛肉より豚肉が一般的だが、三国時代はむしろ牛肉のほうが優位 ■華佗	
	八珍主人	『論語』のなかの食べ物にふれた部分を紹介。八珍主人とは、醬(しょう 「つけ汁」)のこと	
	木の実、そして臘八粥	旧暦十二月八日は「臘八日」といわれ、「臘八粥(ラバジウ)」をつくる ■蘇東坡と荔枝	
	熊掌、駝峰	熊掌と駝峰は珍味の代名詞 ■孟子は熊掌が大好き 死に臨み息子に熊掌を所望した楚の成王	
	春を待つ	このエッセイ、『雨過天青』にも同じ題である。本通信No.98参照 ■九九消寒図	
Ⅴ	殷墟に匹敵する夏墟	五帝の最後、舜は実在性が濃厚。舜が臣下の禹に位を譲り、禹は最初の王朝・夏を開いた	
	歴史に書かれなかった海辺の風景	殷墟から多くの宝貝。宝貝が採れたのは琉球の宮古島。孔子も墨子も殷人の後裔。呉越も殷の一派。徐福は史実 ■宋襄の仁 守株待兔 柳田國男	
	南の道	1993年、ヴェネチアで「旅と文学」と題する国際シンポジウムが開かれ、陳舜臣さんは基調講演をした ■製紙法の西伝 『法顯伝』 越の滅亡と日本への稲作の伝来 徐福 閩人三十六姓	
	古代の日中往還	「記録されない第二の徐福、第三の徐福がいなかったとはいえないだろう」	
	絹の道と海の道	記録以前の「海の道」は、シルクロードに劣らず、気宇壮大なロマンに満ちている ■『仏国記』	
	中国の歴史と情報	中国の新聞の生いたちの話にはじまり、外国情報に対する関心の欠如へと続く。「明治維新で日本は急に近代化の基本づくりに成功したのだから、中国も同じことをやればよいということではないのです。その土台が違うわけです」 ■『阿蘭陀風説書』 蛭社の獄 『海国図志』	